

その7 戌 いぬ 犬

イギリスの大聖堂で有名なノリッジという街を歩いていたら、犬が、さも目的ありそうに「スタスタ」わたしを追い越していった。首輪があるから飼い犬だがリードがついていない。ほかにも飼い犬が自由に歩いている。犬好きの私は、しつけのいい犬たちに感心した。

犬は日本でも、古来から人間の暮らしとともに親しんできた愛すべき小動物だ。





曲亭(滝沢)馬琴は「南総里見八犬伝」という大著を28年かけて109冊、残した。人気作は歌舞伎化され、今年の国立劇場初春公演でも上演された。

里見家再興のため活躍する八人の犬士たち。里見家の息女、伏姫(ふせひめ)から誕生した。赤子を産み落としたのではなく宝珠が八つ天空に飛び去り、その玉を所持し、身体に牡丹の痣(犬の斑・ぶち)がある男たちが、犬士に成長する物語。姫の伏という文字に「犬」その姫を護衛する不思議な力の犬が「八房(やつふさ)」姫と犬の靈魂が八人に受け継がれたという伝奇文学。

NHKテレビの人形劇「新八犬伝」(昭和48年)辻村寿三郎の人形が大人気。とりわけ「たまずさ」という怨霊のまがまがしさが、ドラマ全体を支配した。スーパー歌舞伎「八犬伝」へと命脈は続く。

その犬士の一人、犬塚志乃は女性と見まごう美少年。京舞・井上流に義太夫・上方唄「志乃」がある。前半は娘姿、後半は刀を持ち立ち回りを見せる。ドラマチックなこの舞は井上流だけに伝承されている。

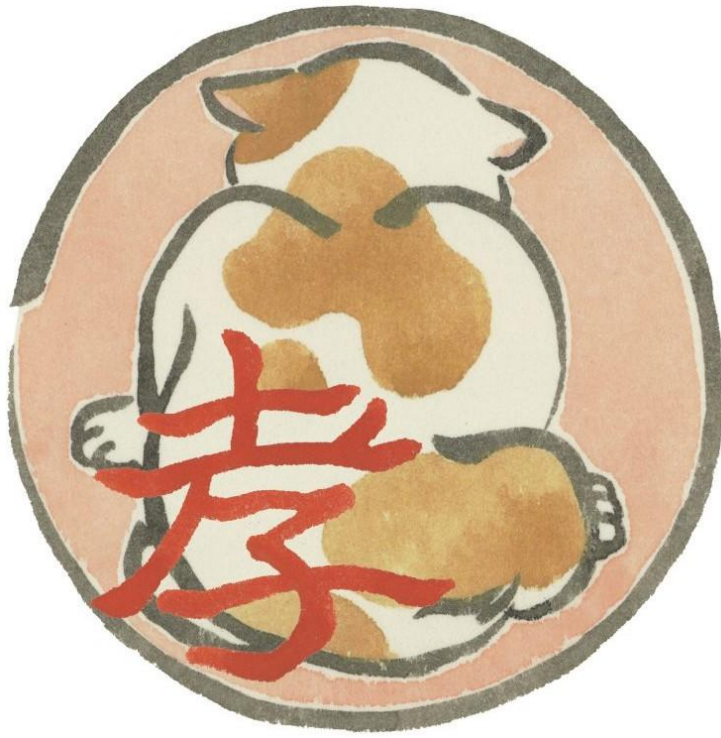
役者や舞踊家は犬の着ぐるみで活躍する。歌舞伎舞踊に長唄「丁稚」がある。御用聞きや配達で犬に出会い吠えられることが多かった。花道から登場する丁稚の後を犬が追ってくるが仲が良い。後半は犬が手拭を使って恋人のようにからむ「クドキ」歌詞には

〽 胴欲な心と知らず 手遅れと言うた言葉に 尾を振るも 他生の縁の下屋

・・・とあって楽しくかわいいので子供の踊りでもよく出る。

黙阿弥の世話物「盲長屋梅加賀鳶」は道玄という按摩が悪者。急病の旅人を療治しながら、殺して懐の金を奪う。落とした煙草入れから罪が露見。最後の逮捕のきっかけは血みどろの着物。それを咥えて出るお手柄は犬。道玄の自宅の「縁の下」から見つかる。





効果音として歌舞伎でも犬の遠吠えは欠かせない。弟子が陰で出したり、お囃子の人々が鳴くこともある。夜の雰囲気が出る。

狂言で犬は「わんわん」と鳴かない。「びょうびょう」という。600年前の日本では「うを一ん うを一ん」という遠吠えが、そう聞こえたらしい。「柿盗人」という作品で、木の上にいる犯人を発見した柿畑の持ち主が、からかって「犬かなあ？」という「びょうびょう」と鳴く場面がある。

犬とともに暮らした日本人、犬は安産。腹帯は戌の日に締める。これで今月は締めくくろう。